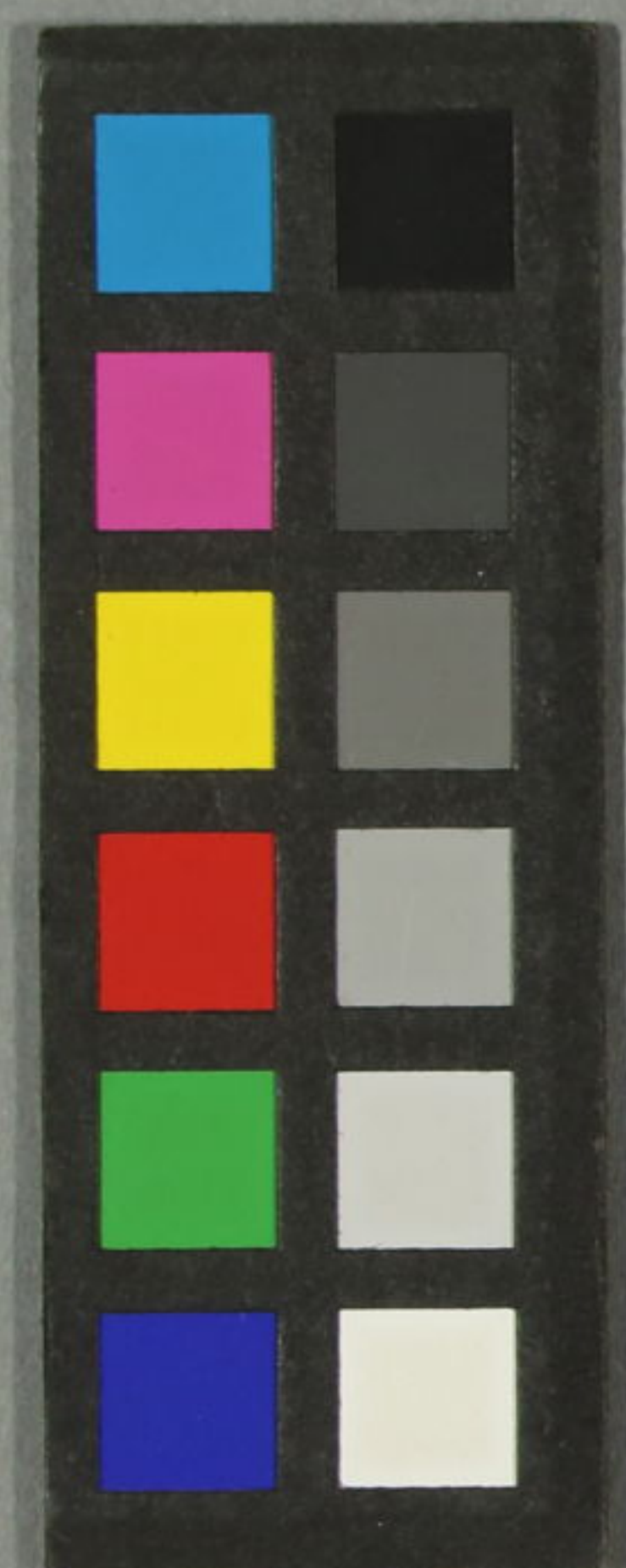




新華つみ

下局
暨七月十九日





八月一日



一灯礼の概述

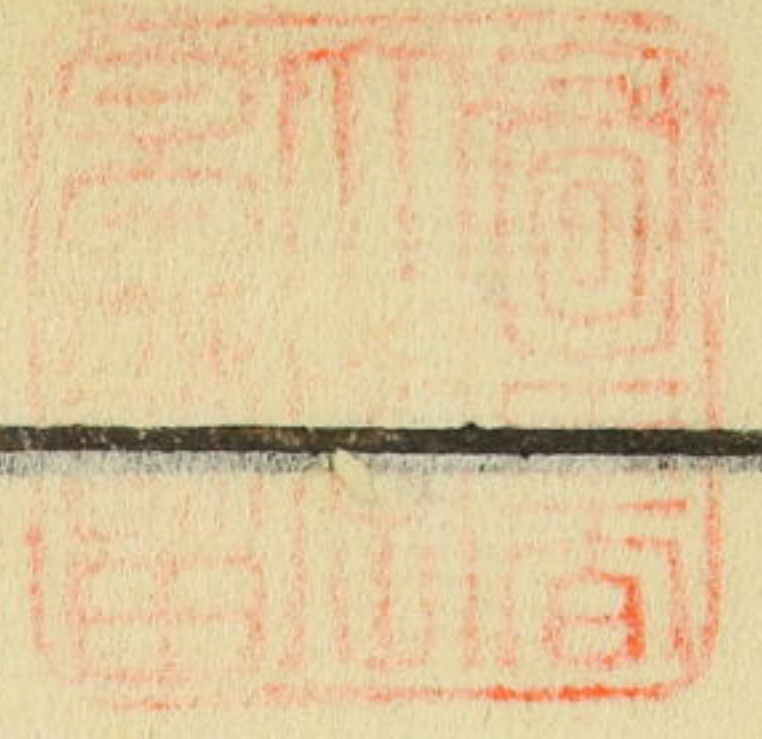
来。海の早。草の
初。海の早。草の
着。草の早。草の
明。草の早。草の
多。草の早。草の

蓮宇 才哉 原坪 解甫

新編

二日 京なりし人河ちて
 ねんたやふを禁の河し山
 横河りなありまの文なるの
 水よりなく涼しや物なりぬ
 夏宿をわく里の宵解け
 夕しやふの上野の寛永寺
 ふやふ入とはありたの様
 新緑の花はけふもさうりり

宗山
 菊古
 柏葉
 貴季
 月
 大島



中河の衣のきよみ男うな
 三 ぼるる
 法華の玉子の売くひの
 四 喝婦平田を向よりさうりり
 代 四をくまのようおるん
 掃よるをすくは虫の居
 後八回板のき色しほる
 りさうしものさうの教下僧

祖康
 於
 華谷
 基九
 芥剛

新緑の山

とほのうゝ—— ねやるの道 アハミ 晩

水仙の流のふち スハウ 泉

ききふんゆのふた カケ川 平

ききふんゆのふた カヒ 半

五日

てな薬師のりんて木下川のなりを
通うはるり原とるをのこり
けり流るりなをわを横をぬり
けり流るり男をぬりぬりぬり
さなるり女をぬりぬりぬり
かへりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬり

中ひて揚句にけりぬりぬりぬりぬり
一羽のうさぎぬりぬりぬりぬりぬり
神のうさぎぬりぬりぬりぬりぬり
慈鳥夜啼のけりぬりぬりぬりぬり
かきぬりぬりぬりぬりぬりぬり
権をぬりぬりぬりぬりぬりぬり

笠雲のふた カヒ 半

ち

夕の薬師のふた イツモ 曲

川 イツモ 曲

巾市や夕葉所より川縁まで イハクニ 梅宿

こゝの白雨社堂より一炊らばとて

所は就しとてぬ涼し ハ 瓦山

七

稲妻やとてぬ入道は待てり 武シウ 持

焦る所の煙ふもとては量持 アキタ 永二

新雪の深きとては花より ツシマ 月静

まゝの下の梨子とては ツシマ 花魂

結梅をもちて花より リウ中 芳洲

あ夏のはなとては フシコ 蓮刈

稲つゝのいづれ金腰の上 トキキ 素石

眉の月も秋のまゝ トキキ 花夕

新雪の音も トキキ 孤暁

お客になくて涼 トキキ 梅志

八 七日不喰

生賣の髪とては トキキ 田川

甚荷ふあは安ふは權ハ 花海

後きつてもまきうハ 吐雪

明らけあふは新ぬハ 麦市

村の坂のゆりあけハ 正隆

もあふは金ハのまき氷室ハ 一歩

遊東山

こそとまゝもくハ 延くハ 遠藤

と物ころり留ハの言のハ 不及

あふはまゝもくハ 延くハ 中狂

初原ハ 用心なるのハ 柳のハ 雪源

水鏡

水鏡ハのやうハも居ハてあふハ 碩水

九 隅帳

啼きハ飛ハきハのすハいハなハ 控

けきハや又ハまハもハ波ハのハ音ハ 柘菴

おろハやハのハまハもハわハるハやハあハ 石

葉肉をもちて能く生れ
 一葉をもちて能く生れ
 雨路
 竹橋
 桃仙
 有儀
 十日 閑定
 花白や梅葉をもちて能く生れ

耳に生れし葉をもちて能く生れ
 舟に生れし葉をもちて能く生れ
 遊茶臼山
 花全
 花全
 花全
 十日

三 契廟

寺ありて新撰集のふし

持

目利のふしある文の花摘

花は咲きしに著有目あるにふし
中よりふしあるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし

新撰集のふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし

名は花のふし

一 花のふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし
花は咲きしに著有目あるにふし

南

智海師

夕しを助けりてあはれしき
 トしき人ぞあはれしき
 夕しき人ぞあはれしき
 夕しき人ぞあはれしき

うらまゐりなむとて
 一やうくお果し也善
 お釘は、おれおれ
 女房も、かつ、かつ、
 智恵師も、おれおれ、
 花、おれおれ、

天國為家

一
は
の
こ
ろ
こ
ろ
ち
や
の
音
松
尾

十三

十四

十五日 王子權現

健勝とすも綴り瑤祭

於

十六 卯酒 拂曉より清く雨

雷乃光るも後生多

いやくと塵端の秋

三

とくしちもさる扇な

豊

拾山

源のけすけ梅る扇谷

仙台

甫山

手玉卵のわはるやむの隙

成雅

ゆけらるる山のてりりる

カヒ

素水

蓮沼の指のともやあ時あ

寸松

よるの涼し吹やての向

竹云

吹り斗もやき音

大岳

道草は咲き水底を窓

梅雪

細くもるあま色

精知

豐公少筆

京

あなを^やたふ^しはまのゆきと雲のち

るなり

常々下りの吹雪。光る雪

北

うゝゆきくもなきうけの
なほ

記

清江先生文集

旁

巾着を古の鞍へお見のうちに
 四季満ちせる川白紙にうつて
 のひなて

哲目
やい片葉をり
人上

體

十八

多々想

ちよきを節を通すすき雁の
 白しと多々想。雁ハ雅と音子
 抱し指し通ハるゝとて、
 一とあつゝきと好まむとす。二世ハ
 やゝなほ三世人雁と電と早て
 とつ人が通うべく

片世に雁あつゝきあつゝ月
 枝のくさつゝりちの枝ハ
 活葉の梅をさくはるゝ
 クラフ 其 松
 尾ハ 素 陽

ひとくさし世のつゝりちの枝
 枝のくさつゝりちの枝ハ
 ちよきを節を通すすき雁の
 白しと多々想。雁ハ雅と音子
 抱し指し通ハるゝとて、
 一とあつゝきと好まむとす。二世ハ
 やゝなほ三世人雁と電と早て
 とつ人が通うべく

上モ 乙 狐
 下ナ 素 古
 ヒメチ 撫 溪
 備ナ 一 扇
 イハ言 竹 路
 袋 踏

大魚や猿人なる世の音 下毛 昔

松の根や猿人なる世の音 閑風

石留を子に授けし世の音 前ハシ 遠音

市田部はま

梅子の歌にゆく世の音 岩シロ 山

旅人を送る世の音 陸セシ 塵

鬼院 けりし花の梅も 石カ 岳

旅よみし猿のふき ミチ 風

旅の客のゆく世の音 カヌマ 一矢

子のもく結ふ花や世の音 エキセシ 翠

さあき

まてく海底の世の音 榴所

雲を袖の世の音 涼城

氣流をよむ世の音 本寶

新なる世の音 花城

夕暇のゆく世の音 碧海

そとくけきとくくあ月 次 雲所

印京あわ

まきき 都なうの山 山 美山

十九

即ち種のお師とやうとて美堀の法經
殊々の好徒方の境とてやうと

やまのやまも 何とてこそ くらむつとも
まききとて 何とてこそ くらむつとも

天台止観 法華秘密十巻を何所院佛

南台法蓮華經 ちととと 法所

新備所

との道をわたりてのまきき 於

栗津の祖廟より系振て

賜ふむつ水のたのめ 大長 文所

九々 美山の碑とし仙果よりあわとて

正面 宗務法所遊所 にかききとてあわとて

た 明もききとてあわとて 宗長

万葉集より

清くはてしなく後世の心

抄

元々 満百

みのり かりあひまゐる

一夏 満りのよりを

月の影あむころりて無一物

極南

おとけなるも父母のまゝもの形世の中
きよはる影山のよりて墓碑をいとおも

南無妙法蓮華経 ちとと 法

新備所

よの道をわたりて人の世を

抄

栗津の祖より系ねて

賜ふむ山崎の木のり

大坂

文

元々 泰山の碑として仙果よりあむ

正面

宗徳法師

にふさるるものをおど

た

明末よりやめせしもの

宗長

万葉集

みづのやうなうたふり

於

元々 満百

みのり

一夏満りのより

月の歌あむころり

極南

おとけなふ父母の

とてハ麗くあつて一夏書画の目課
かゝるにいつく新花摘集成り
孝なるれ無諍也

ふは

深美

也加

三つ四つ

はさのふのさか
なけきほさく人
の山

花よりかき何よりかきかか

花

ささるるはあしとやまをとる

花よりかき何よりかきかか

静和

花よりかき何よりかきかか

思ふよりかきかか

花よりかき何よりかきかか

花

閑興六哥仙

花よりかき何よりかきかか

花

花よりかき何よりかきかか

花よりかき何よりかきかか

花

花よりかき何よりかきかか

花

花よりかき何よりかきかか

花

花よりかき何よりかきかか

花

花よりかき何よりかきかか

花

酒さあて遠い砵の耳よつて
地種多かりて時者多
お風の下ゝぬるの雨府を
むきあふまゝの相續
織り手様と艶々の衣
も居るゝと臺もあ
まのりきりけり月
こゝろゝるにや音 畑

富 於 和 富 於 富 於

花さる咲めゝちさし
あふの果の果の入 器
糸組の寺船より
たきぬ色して言傳
氷明と一時も俄に
照射さるる音
残月の彌に葉の枕を
何れにや水尾に

富 於 和 富 於 富 於

浅金に申るゝ所のなり
氷礫をいふなり
とけり吹雪はあつ川を
さうなるし海を
けり代りきふ古鳥帽
利の度より山崎のむ
なりねえぬなり
住みこる廣をのれ

市 於 富 ち 於 富 和 於

河をいふ所のなり
いせをいふ所の生涯の徒
横屋は二階のなり
おりいふ所のなり
千石の所をいふ所のなり
さうなるし海を

富 和 於 富 和 於

歌

とみほの狭の道あひの
おもひこもあふの道
みほくしの道つづく
直ぐに兼る
（みほく）

梅幸
ち仙
是好
お樹

カクヤち

うーやきの力なるの郭公
草笠おひの櫓の柱
豆煮いせむらうの舟
へお土おつと買ふとき
なつていれを
あふえぬ丘の岩

お樹
お
お
お
お

ロ^リそく水みみの箕面越
 陣の口やうと身も川も
 山も川も海も海も
 かみりあきて神様
 かし歌さなれ歌うより
 何のいこむ酒の売瓶
 赤葉のいつとつと歌の序
 にははらなくささるまふ

水 水 水 水 水 水 水

現けおのりといふ冬まかり
 煮るまの鯉富もぬき出す
 金ももそのやといふのれ
 古着まへる店なりま
 極板より将主家の跡もみは
 欠く茶碗をいもてるす
 歳やいひのちも客家の名も
 いふ世のあそびは後者す

水 水 水 水 水 水 水

朝露をたふさぐ露のなみく
 きのふのなみく。月を乳
 下馬先のぬけの廣く
 傷をいふ。この湯の
 身をふくまゆ。いふ
 中より。おきき提ちの
 ちのちの提ちの系。身を
 ねえ。こゝろ。涼む木の子

永 春 永 春 永 春 永 春

ナリ

ちちく。と。場の海。う。る。臨。見
 種。う。所。見。一。あ。の。土。居。暮
 算。盤。う。さ。の。の。言。う。こ。こ。て
 借。銭。祝。う。す。ま。よ。借。り。ん
 西。子。の。花。を。い。は。る。こ。持。せ。ん
 七。は。の。う。こ。も。号。い。を

永 春 永 春 永 春 永 春

新編下

一むうーんやうとて五頭
 浅き水あふれに移るな
 杜まやう燈をそく水の香
 輝砂のふさふさの光る
 夕陽をそく宿の光る
 凡そのもろく涼板を

武傍
 せん
 採むめ

五月十八日す燭

飛石の何れをたのむ
 庭まりの照る夏の光
 葛の棚をそく角を
 移川ぬきよの光る
 あま来て月の光るの光る
 むし(若き)の光る

詢
 高
 高
 高
 高
 高

新編下

新編下

う
 金箱^うは言ふ所の蒲萄^う
 むし造りの門も文^うい他
 新扇かきとて知る能^う級者
 すぎ遠いも途^うに明
 小着^うをへ上着^うは毛^う衣^う
 何^うとて人の心^うをさ^う
 ちう^うならとて何^うと眼^うを舟
 け畦^うまうと播^うる路^う末
 於^う 於^う 於^う 於^う 於^う 於^う

盛^うてあす^うの^うさ^うに^うけ^うを^う
 大悟^うは^うな^う小僧^う也^う
 何^うとてあ^うせ^うう^うて^う異^うを^う
 解^うて^う法^うを^う成^うぬ^うも^う新^う
 ナ
 幸^うの^う片^うの^う方^うの^う心^うを^う
 訓^う得^うて^うる^う人^うを^うよ^うの^う僕^う
 付^う貸^うの^う候^うを^う素^う包^う入^うて^う何^う
 工^うを^う智^うの^う片^うの^う神^うの^う機^うを^う
 於^う 於^う 於^う 於^う 於^う 於^う

仲よふ世の夢の及こし	言	於
るゝのまをーのまをうまを	言	於
あうーの木端の雲馬のめ	言	於
鈴のこゝろのうち	言	於
二三帖のまやめけのふりはれ	言	於
ちろゝも満ー所な電	言	於
月を向く新さーとして雲のむ	言	於
把りすゝまはーのうさく	言	於

ナウ

魂のまゝ未だのまゝのまゝ	言	於
吃をまゝの言をす	言	於
とらゝは古銭の目利はつや	言	於
破るゝまゝの雨のけなま	言	於
暗くもたのま苗唄して	言	於
世のゆゑまゝの	言	於

別室の下に粗ねれ岩をくぐ
 雲をたふす人たふす人
 けしきうききうきうき
 岩の下のまじり伸所
 岩の下のまじり伸所
 岩の下のまじり伸所
 岩の下のまじり伸所

永年
 岩泉
 岩泉
 岩泉

梅年

別室の下に粗ねれ岩をくぐ
 雲をたふす人たふす人
 けしきうききうきうき
 岩の下のまじり伸所
 岩の下のまじり伸所
 岩の下のまじり伸所
 岩の下のまじり伸所

永年
 岩泉
 岩泉
 岩泉

新撰

^ウ
 地^ウの^ウ田^ウの^ウ夢^ウを^ウ昔^ウの^ウ頃^ウに^ウ
 一^ウ省^ウの^ウ夢^ウを^ウ残^ウの^ウ曠^ウ
 夢^ウを^ウ流^ウ石^ウを^ウと^ウ答^ウに^ウけ^ウ
 する^ウ所^ウを^ウ探^ウを^ウ時^ウを^ウ
 待^ウを^ウ耳^ウを^ウ所^ウを^ウ無^ウに^ウ
 こそ^ウの^ウ地^ウの^ウこそ^ウ道^ウに^ウお^ウ
 枯^ウ艸^ウを^ウさ^ウの^ウ影^ウを^ウく^ウ三^ウの^ウ月^ウ
 ま^ウい^ウの^ウ夢^ウを^ウ控^ウ釘^ウを^ウか^ウす

石
 石 海 控 江 州 曠 石

採^ナ出^ナを^ナ和^ナ子^ナ扱^ナ上^ナを^ナち^ナなり
 價^ナを^ナけ^ナぬ^ナを^ナく^ナに^ナま^ナの^ナ道^ナ
 川^ナを^ナと^ナも^ナの^ナ現^ナに^ナ花^ナを^ナ見^ナや
 ち^ナを^ナと^ナあ^ナる^ナを^ナ又^ナ者^ナの^ナ山^ナ
 乾^ナを^ナ鼻^ナの^ナ形^ナを^ナい^ナひ^ナの^ナ雛^ナ
 か^ナま^ナき^ナの^ナ世^ナを^ナあ^ナる^ナ
 初^ナ卵^ナを^ナあ^ナる^ナを^ナ十^ナ五^ナに^ナ
 招^ナけ^ナる^ナを^ナく^ナの^ナ夢^ナを^ナ

石 海 控 江 州 曠 石

新撰

終

次の日のお加吉を乗舟
はるるおしよ遊す四節
の梅壁のついで旅ふ諸河
旅立送る馬の足と
持好い歌子の舟を便文と携
つと著る。お様の御
満々のお歌八月十四
迄この遊ふ旅の荊吹

磯子石海松江州磯

舟とついで雁の舟も也
舟をいづきの船も位
と拂ふ残を形して算は
片くはより又雲も持て
遊んで帰るお花を所さく
はるる鯉の水もやいふ

更中石海松江州

花より草より音より香
 形所の明をて解るゝもてうな
 扇先を異く向ふなりとも
 竹の子の親よりかぬやうに
 妻あつて子のやうにほろりあ
 結ぶの蔓は破品にあらは
 炭火の山かけより花より

ト早
 竹ま
 古葛
 武鶴
 然山
 兼の
 木葉

三か
 アハ
 トキキ

卜早

竹

馬

武彥

五山

兼可

木葉

以紙茶催也

弓雲

花柳をいふをいふは蛇の道
 夕な細ういさう多 啼
 とや 指捌の牙の歯を成て
 啼く声はとて揚つてり也
 色くは雲にまきまき何ぞ
 鯨の鯛の糸を何ぞ
 太年 小櫓 年 子 子

太年

江
橋

五

年

控

徳島（海）はさうな母やう
 大乳めさうな草葉を法
 君君のひのちるはさ東な
 同し言はぬ旅先の燕
 土器のやまゝいほや酒
 裾の指りのるゆる裾子
 裁法のほをぬこうその作
 山いさなうせ本紙どつち

年 宅 年 宅 年 宅 年 宅

海道の新道川てまお達し
 陸せんぬいゝ網を冠せる
 毛いゝ親目あゝたゞほやまを
 多るぬ能子まゝ筒きつた
 伊豆那の色何をせぬやう
 横はなう道ぬ果の上ふ
 と時ふ子もあゝいそ屋敷を
 さうわしむ軍をぬけ

年 宅 年 宅 年 宅 年 宅

輕くて拂ききつゝあけりや
 せこくも晴るあけ條つ目
 櫻灯を梅の枝をさくらん
 うつゝ大京の田舎しん
 雪のぬりて雪を流るる
 水はさるゝその河をさ
 富ののけりもさうは月見
 一ぱりあふれさうかき

年 松 電 年 松 電 年 松

いさくはるあけ葉字の樂さ
 いさくはるあけ葉字の樂さ
 ところと晴る月見遠く
 々盡く出くさうなる
 神機あけさるる花しる
 牡丹芝のさうもの

年 松 電 年 松 電 年 松

田川 秋葉の落葉

中根 春代 ちり連こ

多 陽 句 ちり連

とみ 下 秋葉 ちり ちり 連

魯文

叶 葉

船 既 目 入 叶 ちり 連

王 子

魯 山

船 既 目 入 叶 ちり 連

イ セ

果 推

船 既 目 入 叶 ちり 連

江

八 月

靜 五

船 既 目 入 叶 ちり 連

秋 葉

船 既 目 入 叶 ちり 連

船 既 目 入 叶 ちり 連

五

船 既 目 入 叶 ちり 連

五

船 既 目 入 叶 ちり 連

五

船 既 目 入 叶 ちり 連

於

海を移るゝの雀の羽をそ
めくおろし便舟を結
ゆふそ尾のよといふも人
無程海とある虎のあはれ
くろくし知し。事後のまじり
尾より母のあはれを
あのみぬるあはれ。のあ
袴の葛はくろくし

五 五 五 五 五 五 五

白木を飛葉まのりの高きく
石匠のあはれ。ゆのくろくし
あはれ。ねをくろくし。あはれ
あはれ。すまふまのあはれ
壬生村のあはれ。あはれ。あ
あはれ。あはれ。あはれ。あ
あはれ。あはれ。あはれ。あ
あはれ。あはれ。あはれ。あ

五 五 五 五 五 五 五

坂路の甚き所 徳平の門より
 へせ活好の金 成り
 占ひて 夢に みる 主の 出
 懐 ぬく ぬく 懐 ぬく ぬく
 茶 焙 の 煙 の ぬく ぬく 一 煙
 野 庭 の 庵 の ぬく ぬく ぬく
 夕 月 の 市 の 買 の ぬく ぬく ぬく
 秋 の 陣 中 の ぬく ぬく ぬく

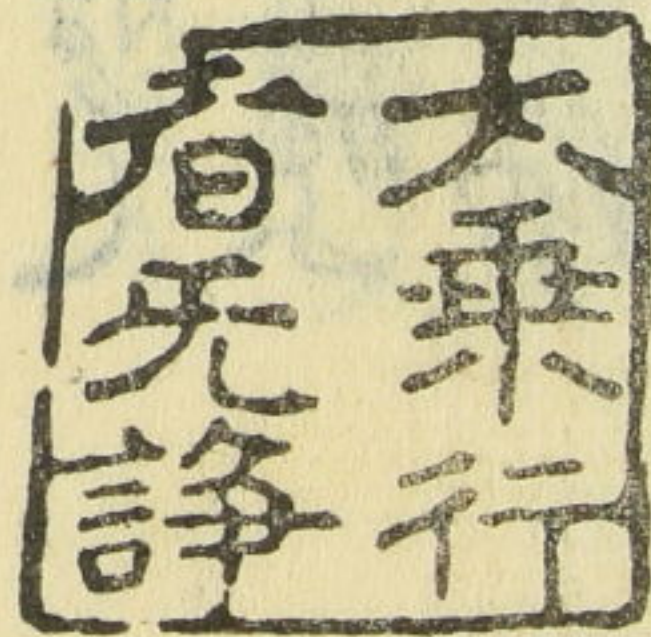
五 於 五 於 五 於 五 於

水 留 の 墓 の ぬく ぬく 五 十 年
 ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく
 ト 垣 の つ ぬく ぬく ぬく ぬく
 ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく
 ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく
 ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく

五 於 五 於 五 於 五 於

四十六年 癸未九月

しるし 中 昭 昭 昭 昭 昭



新花摘乾坤尾

夕まや田んぼをめぐりし神垣の
かきくももる其角堂のありは
こゝ道のかやなる室井晋子
親近おもふふも孝志はく
なをたもちぬか為る一夏百句
のく新花摘集と名づけ
蛙とむむ古池の濁はよの
もちも葉のそらよふ言は葉

新刊

是に及手向たるハ風流なる
とくさなき大功德とや
いふとおもふ
台ハ法師ハ多田孝泉
ハ
川月雪花ハ
とふひとのやびれ
友となさるる者也これ

其角堂編輯書目

奚々細道 其角翁一冊 自筆 俳諧みづな子 二冊

俳諧繪入百題 四冊 同 目々左藤 二冊

發句五百題 四冊 同 指歩江 一冊

明治十六年十一月九日出板 御届同十二月出板

編輯兼 出版人 晉 永機

南葛飾郡小梅村六十四番地

發賣人 杏寄半造

浅州區須賀町十九番地

